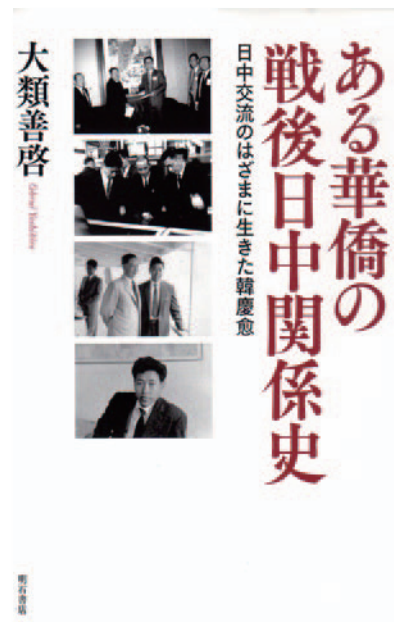


◆新刊紹介◆

中国黒竜江省ハルビン市郊外に合祀されている満蒙開拓団の方々の公墓の存在を、昨年9月号から11月号・3回に亘って紹介くださった、「方正友好交流の会」事務局長の大類善啓氏（一社/日中科学技術文化センター理事）による新刊が、今年8月末、明石書店より出版されました。著者・大類氏の、上梓にあたってのお気持ちをご紹介します。（田井）



定価：2300円（＋税）
四六判 並製 248ページ

『ある華僑の戦後日中関係史』

—日中交流のはざまに生きた韓慶愈—
（明石書店を上梓して）

現在の日中関係に想つ

大類善啓

大きい書店をのぞけば、「中国が崩壊する」と云った本が並び、週刊誌には反中感情や嫌韓感情を煽るような記事が躍っている。「日中友好」を望むような本が売れず、「中国脅威論」や「韓国嫌悪観」を煽るような本が売れるというのは本当に嘆かわしい。

思えば40余年前、日中国交回復を求める国民運動が全国的に広がり、政府を動かす力になった。国交正常化以前でも実は、民間レベルでの豊かな交流が広がっていたのである。

例えば1954年、李徳全を団長とし、廖承志を副団長とする新中国になって最初の代表団、中国紅十字会代表団の来日は「李徳全旋風」と呼ばれるほど日本の民衆は歓迎し、新聞は連日、好意的に記事を掲載したのだった。李徳全一行が京都から大阪へ向かう一時間、国道の両側から、人々は絶え間なく赤十字の旗を振って歓迎したのである。

その後、世界的な京劇役者・梅蘭芳メイランファンを代表とする戦後初めての京劇代表団の来日の際、戦前の軍部の嫌な記憶がある梅蘭芳に対して周恩来総理は、「愛国的な芸術家であるあなたはきっと、心の中にわだかまりがあるでしょう」と気遣いながらも、大きな視野で日中の友好を願って日本で京劇公演を支援し送り出した。中国切っぴの映画スター・趙丹と高峰秀子ら日本映画人との交流など、国交回復以前に、豊かな日中の民間交流が生き生きと輝いていた。

本書ではまた、1953年から始まった華僑帰国運動についても詳細に紹介し、語られることの少ない「華僑からみた戦後の日中関係史として貴重な資料といえる」(〈解説〉加藤千洋・同志社大学大学院教授・元朝日新聞中国総局長)と評された。日中政府レベルの日中関係が冷え込む今こそ、本書を通じて、過去の交流を思い返していただきたいと思う。

おおるい・よしひろ：一般社団法人日中科学技術文化センター理事/
方正友好交流の会事務局長
E-mail:ohrui@jcst.or.jp
☎：090-2768-3338

当社団の創設者であり、私の敬愛する韓慶愈さんの一代記が上梓された。激動の昭和時代に日中両国のはざまにあって志を立て、生き抜いて来られた韓さんの真摯な温かいお人柄が見事に描かれている。国と国との関係がどのようになっても、両国の国民がこのような生き方と交流を積み上げれば必ず道が拓けるものと改めて確信した次第である。(中略)韓さんは今回、同志の友人らと語らい「東方文明振興会」を立ち上げられ、総代表に推されて中国文明の振興とマナーの向上を呼び掛けられている。生涯を日中の友好交流に尽くされた韓さんのますますのご活躍を祈念したい。

野沢太三（一般社団法人・日中科学技術センター会長/元法務大臣）

※同書は、東方書店、内山書店、三省堂書店、紀伊国屋書店・他の中国史関連コーナー或いはその周辺で購入できます。
明石書店の関連ページ <http://www.akashi.co.jp/book/b182615.html>